OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	窒素を汲んで五十年
Author(s)	清水, 克哉
Citation	大阪大学低温センターだより. 2022, 172, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

窒素を汲んで五十年

基礎工学研究科附属極限科学センター　　清水 克哉
E-mail：shimizu@stec.es.osaka-u.ac.jp

昨日、４年前に訪れた街が戦禍にあるといるニュースが届き、驚きと悲しみをもって書いています。創立100周年をむかえた、ウクライナ国立科学アカデミー記念事業として、Kharkivで開催された低温物理の国際会議でした。小規模ながら、若手主導で歴史ある低温物理研究を進める、刺激的で印象的な会議だったと思い出しています。建物の入り口には、初期のヘリウムの液化装置などが並べられていました。２週間前に尋ねると、そのとき世話をしてくれたスタッフから楽観的なメールが届いていたのですが、昨日は「やはりその認識は間違っていた」と。「日本は平和のままでいることを願っている」と結ばれていました。本稿の出版時にはどのような世界になっているのでしょうか。とにかく今は彼らとその街に平穏が戻ることを願っています。

今年度末をもって編集委員長を交代させていただくことになり、この機会に巻頭言を書かせていただくことになりました。2002年に編集委員にお誘いを受けて、そのあと2014年に前委員長の北岡先生から後任をおひきうけしました。ヘリウムのヘビーユーザーの研究室のひとつだった為、この20年前以前より投稿させていただく機会が何度かありましたので、同じような記事を書いていたかもしれませんがお許しください。

本誌に思う特徴はふたつあります。ひとつは「阪大オリジナル」を掲げて、他人の研究の後追いではない阪大発の研究や成果を共有するところ。その敷居は高いですが、「オリジナル」「オンリーワン」を意識することの大切さと同時に、そこに投稿する誇りのようなものをいつも感じていました。もうひとつが、窒素を汲んでいる間に読めてしまうところ。読みやすく簡潔で、極めつけのちょっとしたアイデアがたくさん紹介されていました。基礎工本館に研究室があったときは、週に何度か汲みに行くたびに、何冊かおいてある本誌を手にとって、読み返していました。極限センターには自前のCEがあるためと自分で汲む機会もほぼ無くなってしまったため、ふと汲みに行ったときにはとても手持ち無沙汰に感じます。

さて、汲んでいる間は、ぼーっとしないで溢れないよう見守っていないといけないのですが、読んでいるうちに、「これうちでも今度ためしてみよう」とか考えがうまれることもあったように思います。このネタなら、うまくいけば論文に投稿できるかもしれないな、とかさらに思いを膨らませていると、あっというまに満タンになった窒素が容器からあふれる音と白煙でふと我に返るのです。「ご飯が炊けたよ」と宿の女主人に五十年分の夢から起こされるのにも似ています。悟りをひらくとまでいかなくてもいいですが、本誌が「邯鄲の枕」となれるのではないかと思っていたことを思い出しました。